

大豆「里のほほえみ」における堆肥利用（分施）の実証**要約**

開花期の追肥により、子実重は多くなる傾向が確認された。また、追肥を実施した区のうち、基肥に鶏ふんを施用した区は、基肥に化学肥料を施用した区に比べ、子実重が多くなり、収入及び所得が高くなった。

○ 展示のねらい

みどりの食料システム戦略に基づき、化学肥料低減を目指すとともに、生産コストの増加を抑制するため、鶏ふんを施用し、地域に適した「里のほほえみ」の安定栽培法の確立を図る。

○ 主な成果

試験区は表1のとおり設定した。

供試区1の子実重は273kg/10a（対照区比132%）、供試区2は234kg/10a（対照区比113%）であった。供試区1と供試区2の収入は、対照区と比べて高くなり、所得は、供試区1で13,563円/10a高く、供試区2で同等となった（表2）。

表1 試験区概要

| 区 | 基肥施用量 (10a当たり) | 開花期追肥 (10a当たり) | 総窒素量 (10a当たり) |
|---------|----------------------------|-------------------|------------------|
| 供試区1 | 発酵鶏ふん（粒状） N:3.3% 105kg* | 尿素 N:46% 20kg | 11.2kg |
| 供試区2 | JAなすの豆専用（5-20-20） 40kg | 尿素 N:46% 20kg | 11.2kg |
| 対照区（慣行） | オール13（13-13-13） 40kg | — | 5.2kg |

※肥効率60%で計算

表2 収量及び経営試算

| 区 | 子実重 (kg/10a) | 収入 ^{注1} (円/10a) | 支出 ^{注2} (円/10a) | 所得（収入-支出） (円/10a) |
|---------|-----------------|-----------------------------|-----------------------------|----------------------|
| 供試区1 | 273 | 69,752 | 7,708 | 62,044 |
| 供試区2 | 234 | 59,787 | 11,167 | 48,620 |
| 対照区（慣行） | 207 | 52,889 | 4,408 | 48,481 |

注1）大豆販売額、「水田の直接支払交付金」の合計

注2）肥料費と追肥作業料金の合計

○ 今後の方向性

化学肥料代替としての鶏ふんの活用は、所得の向上に有効であることが判明したため、生産現場へ結果の周知を図り、大豆の生産拡大を目指す。さらに今後は、全量基肥体系による地域適応性を検証し、安定栽培法の確立を図る。

実施機関：那須農業振興事務所経営普及部 実施場所：大田原市

問合せ先：栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315